

72 アルテフェスタ2009
ダンスポケット2009春
H21.4.26

73 鳥取県野外彫刻データマップ作成プロジェクト
H21.5.1～H22.3.31

74 アートフォーラム2009 辻村寿三郎講演会
一人形師 辻村寿三郎・ジュサブローを語る—
H21.5.17

75 朗読と音楽で楽しむ宮沢賢治の世界
音の絵本「よだかの星」「どんぐりと山猫」コンサート
H21.5.30

76 アルテフェスタ2009
西岡千秋・寺内智子ジョイントコンサート
二人のモノローグによる歌曲集「木の匙」
H21.7.3

77

78 アルテフェスタ2009 演劇をもっと楽しむために
俳優のからだをみる、ことばをきく
—フィクションをつくる身体と言葉・鳥の劇場の実践から—
H21.6.22

79 アートマネジメント人材育成を目標とする
国際交流
H21

80 セタコンサート～室内楽のたのしみ～
H21.7.11

81 アートフォーラム2009 私の時代・その出会い
評論家 角秋勝治講演会
H21.7.17

82 芸術をかじってみませんか
コミュニティアート講座
H21.8.28～H21.10.17

83

84 寄付が変える市民社会・寄付が創る芸術文化
～これからのファンドレイジング
H21.9.22

85 平成21年度 鳥取オペラ協会公演
モーツァルト作曲オペラ「フィガロの結婚」公演
H21.10.3～4

86 ダンスポケット2009秋
H21.11.7～8

87 ずぶずぶ・湖山池としての私
H21.11.19～23

88 「音の個展Ⅰ」
新倉 健〜物語から聴こえてくる音たち〜
H21.11.14, H21.11.15

89

96 平成21年度 青少年のためのオペラ入門
H21.12.10, H22.1.24, 1.26, 2.3, 2.10, 2.14,
H22.2.16, 2.22, 2.25

97

90 フォーラム
アートとまちづくりの幸せな関係を考える
イン鹿野〜アーティスト・イン・空き家の可能性〜
H21.11.21

98 アートフォーラム 彫刻の街・倉吉を発信する
倉吉博物館長 前田明範講演会
H22.2.1

91

99 アルテフェスタ2009
こどもミュージカル「いばら姫」公演
H22.2.19, H22.2.24

92 2009アルテフェスタ
コレペティートル田島亘祥氏による
「オペラ歌唱の実際」公開レッスン
H21.12.6

100 作曲工房「パパゲーノ」コレクションⅣ‘10
H22.3.7

93 平成21年度のアートフォーラム用
ポスター等デザイン
H21.5.17, H21.7.17

101 芸術文化センター用パネル2点デザイン
H21.4.1

94 鳥取大学サイエンス・アカデミー
「まちに芸術の風・いま鳥取から」
〜芸術文化センターの試み〜
H21.12.12

95 劇場が社会とともにあるために
〜ドイツの劇場と文化政策をととして
H22.1.30

事業形態

講演

上演

展示

制作・創作

調査・研究

ワークショップ

その他



開催期日・期間： / 場所：

地域別

財源： / 主催・後援・共催・協力など：

参加者数：

担当者名

出演

松本大樹 ダンスコング
ADM ウェンズデーズキッズ

プログラム

「鳥の目で見ると」

作・構成:佐分利育代

演・ウェンズデーズキッズ, ADM

「扉を開けて」

作・演:田中悦子・ダンスコング

「幹ノ中ニ咲ク花」

作・演:松本大樹

「絆」

作・振付:松本大樹

演・ダンスコング, ADM

☆プログラム

☆ 高田 朋樹 松本大樹 案・構成:松本大樹

☆ 玉木 聡子



アンケート 28回答より

【リニューアルしたアートプラザについて(7人の意見)】

立派になりました 美しくなりました 良かった
美しく芸術センターにふさわしくなった
明るくなり、広く感じられる 暖かみの少ない建物
新しくなってからきた

【どちらから】

鳥取市10 湖山町9 学内3 鳥取県東部2
鳥取県中部2 県外(東京、神奈川)2

【交通手段】

車17 徒歩7 JR2 バス1 自転車1 飛行機1

【年齢】

10代:5 20代:2 30代:5 50代:4 40代:3
60代:2 70代:1 無回答:5

【印象に残った作品(複数)】

全部:8 絆:16 鳥の目で見ると:5 幹ノ中ニ咲ク花:5
扉を開けて:4 ☆:2

開催期日:H21.4.26 /会場:鳥取大学アートプラザ

財源:地域貢献支援事業

上演

佐分利育代



事業内容

鳥取県は米子彫刻シンポジウムや倉吉・緑の彫刻賞の取り組みなど全国に誇れる野外彫刻の実績を有しているが全県を対象に詳しく調査研究されていない現状にあり、その文化的価値が充分活用されているとは言いがたい。このような状況を踏まえ鳥取県野外彫刻のデータマップを作成し、広く一般に公開し、紹介することで文化的資源の活用につなげることを狙いとした。

マップ作りにあたっては学術的基礎資料をベースにしながらもわかりやすく魅力的なものを目指した。今回のプロジェクトは産学連携の形態をとって実施した。共同作業として「有限会社キーワード」の全面的な協力を得て実施した。

具体的には芸術文化センターのホームページ上でコンテンツの発信を行った。まとめた資料や写真をウェブサイトのコンテンツとして落とし込み、ネット上のマップサービス(グーグル等による)やその他のデータと組み合わせることにより、マップづくりを進め、鳥取の野外彫刻を広く発信することができた。第1段階として写真及び共通の調査シートに基づく100個程度の調

査が完了した段階でホームページ上にアップし公開した。3月現在で108体の野外彫刻をアップしている。

なお、今回は学部長経費の獲得によってその実現が大幅に進んだ。

成果

成果として次の4点が挙げられる。

1. 鳥取県内に設置されている野外彫刻について、そのほとんどを網羅する資料として学術的価値が高い基礎資料となる。
2. これからの野外彫刻の役割や環境にふさわしい彫刻を考えていく資料となる。
3. 野外彫刻の文化資源の活用。データベース化し公開することによって世代間にわたる教育面に加えて、観光等への活用など2次的、3次的な有効活用が期待される。
4. 野外彫刻をキーワードとする空間、環境を意識したまちづくり・地域おこしの提案となり、芸術文化センターの掲げる「地域(鳥取県内)の芸術文化資源の把握とそのマップづくり」にも資する。



鳥取 Art Date Base Project HPより <http://keyword-co.net/tottori-sculpture/>

調査期間:H21.5.1~H22.3.31 / 調査対象:鳥取県全域

財源:地域学部長経費 / 共同研究: 有限会社 キーワード





事業内容

日本を代表する人形作家、衣装デザイナーとしても著名な辻村寿三郎氏を迎えて講演会を行なった。

辻村氏は1933年11月に旧満州に生まれ、少年時代を大陸で過ごし、広島県三次市で終戦を迎えている。

幼い頃からの趣味であった創作人形は1974年NHKテレビの人形劇「新八犬伝」で一躍脚光を浴び、その後、数々の創作人形劇の発表、舞台衣装のデザインなどで活躍している。日本橋人形町にオープンしたジュサブロー館は辻村氏の創作人形の展示館であり、人形制作のアトリエにもなっている。ここを訪ねた石谷が本人と出会い、話をする中でこの企画が実現した。

氏は創作人形の一体を持参し講演の合間に人形の舞を披露し、多くの参加者の心をつかんだ。

成果

講演そして上演形式の新しい講演のあり方を展開できた。

オルタナティブスペースとして注目される人形の館・ジュサブロー館についても触れられ、鳥取の空きスペースの有効活用の見本になる一つの成功例を見ることができた。

課題など

定員70名を申し込み制にしたが、締め切り前に定員に達してしまったため断らざるを得なかった。

開催期日：H21.5.17 / 会場：鳥取大学アートプラザ

財源：鳥取大学地域貢献事業

参加者数：70名

講演
上演

石谷 孝二
平井 覚



朗読と音楽で楽しむ宮沢賢治の世界
音の絵本「よだかの星」「どんぐりと山猫」コンサート

上演

制作·创作

新倉

健

75

事業内容

地域学部棟の改修工事が終わり、平成21年の4月にリニューアル・オープンした「アートプラザ」のお披露目を兼ねて、大学開放推進事業として実施した。芸術文化センターの新倉健が作曲家として参加している、朗読と音楽による「音の絵本」のシリーズから、宮沢賢治の童話を上演し、宮沢賢治のつくった歌や、好んで歌ったうたなどの紹介も行なった。広報として、附属幼稚園と附属小学校にチラシを配布し、予約制で入場を整理する形をとった。宮沢賢治の童話をテーマにしていたことと、チラシ配布の効果があり、ふだんは60名程度の定員のところ、101名の入場があった。



音の絵本コンサートとは？

このコンサートは、小さいお子様のいらっしゃるご家庭も気軽に参加いただける楽しいコンサートです。「音の絵本」は、聴く人が自由に想像力をはばかせて楽しむ、朗読と音楽による「絵のない絵本」です。お話と音楽で楽しい「国語習得の要素」がもみりられます。平成25年1月からリニューアルされ、もっとおしゃしゃりしてきれいになった鳥取大学「アート・プラザ」に、どうぞお気軽に足を運んでください。

プログラム ✓

◆ 第1部 賢治がつくった曲・うたった歌

日 語：森白 健
デュオ：関本美穂紀 ゼアノ・中嶋 真由
『星めりりの歌』『トロイメライ』
デュオを演じ、作曲もした関本美穂紀が作った
物語に自分自身を投影して歌った楽曲などを、
エピソードを交えながら紹介します。



◆ 第2部「どんぐりと山猫」(宮沢賢治作、新倉健作画)

原 潤・小嶋 幸子
監製西条照山・ジュディ・オリン 演出 千鶴 ジョージ・オリン 美術 佐伯
ユウナ 山下 雅夫 チュロ 別々本撮影
おかしな話ですが、あと土曜日の夕刻、一郎のうちにきました。
かねた一郎さ。九月十九日
あなたに、ごきげんよといはせて、サーです。
あした、あんたのばいばいしますから、おのべんぬわい。
とさどばたぬわてぬわい。



◆ 第3部「よだかの星」(宮沢賢治作、新倉健作画)

朗 読：小幡幸子 サブロ：細木竜紀 ピアノ：中島芳恵

あゝ、やぶとむしや、たくさんの羽生が、毎晩寝に脱走する。そしてそのたぐ一つの傷がほとんどは腹に殺される。それがこんなにつらいのだ。あつちの、つらい。

僕はもう生を食べないで隣で死ぬ。いやその前にもう僕が腹を殺すだろう。いや、その前に、僕は温かく温かく空の向うに行ってしまう。



ふたがは雲に包って窓のそらの
影の美しいイサオンの唇の光にまっすぐに飛び立ちました。

開催期日：H21.5.30 / 会場：鳥取大学アートプラザ

財源：鳥取大学開放推進事業

主催：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター 共催：音の絵本制作委員会

参加者数：約100名





事業内容:

中田喜直が、1964年第19回芸術祭参加作品として朝日放送の委嘱により作曲した作品「二人のモノローグによる 木の匙」を公演。若い男女の結婚前から妊娠までの日常生活を、男性、女性の心の動きを通してモノローグで綴られるこの歌曲集は、寺山修司の目線で描かれた詩によるものである。演劇企画夢ORES代表の森本孝文氏に演出を依頼し、新たな試みとしてダンサー(三島麻美:大学院地域学研究科2年)を加えたかたちで「木の匙」の世界を創り上げた。

コンサートの前半は、「木の匙」の作曲者中田喜直の歌曲作品を披露した。会場は、客席を特設で階段状に作り、ダンサー、歌い手の動きがよくみえるように工夫した。(写真右下)

「アザレアのまち音楽祭2009」においても、同じプログラムで参加した。(6月9日 倉吉交流プラザにて)

今後の課題:

- ・ダンスのスペースを確保する為に客席を広く設定したが、その分、客席数が限定されてしまい、立ち見を出してしまったので2回公演を考えるべきであった。
- ・入場無料というのは入場者を把握しづらいので、整理券発行などの工夫が必要であった。

出演

バリトン:西岡千秋 ソプラノ:寺内智子

演出:森本孝文 ピアノ:新田恵理子

ダンス:三島麻美

プログラム

第一部

<中田喜直歌曲作品より>

むこうむこう(寺内) 歌をください(寺内)

さくら横ちょう(西岡) 結婚(西岡)

めだかの学校(西岡)

夏の思い出(寺内・西岡)他

第二部

二人のモノローグによる歌曲集「木の匙」

(作曲:中田喜直 作詞:寺山修司)



開催期日: H21.7.3 / 会場: 鳥取大学アートプラザ

財源: 鳥取大学地域貢献事業・芸術文化センター「アートプロジェクト」
アルテフェスタ2009 共催: アザレアのまち音楽祭
参加者数: 約70名





二人のハートに響く音楽

木の匙

西岡千秋・寺内智子 ジョイントコンサート
ピアノ：高橋孝子 声楽：寺内智子

2008.7/3(土) 午後7時開演
会場：湯沢大学ホール
大森地区

高橋孝子と寺内智子の二人のハートに響く音楽。二人のハートに響く音楽。二人のハートに響く音楽。

高橋孝子	寺内智子
ピアノ	声楽
高橋孝子	寺内智子
ピアノ	声楽

高橋孝子と寺内智子の二人のハートに響く音楽。二人のハートに響く音楽。二人のハートに響く音楽。



事業内容

鳥の劇場を迎えて鳥取大学アートプラザで実施した。

空間の真ん中に2.7m四方の舞台を仮設し、そこに鳥の劇場の俳優がたつて、レパトリー作品の一部を演じた。演出家中島諒人氏の解説を交えて演劇の魅力を伝えた。ぐるっと周囲を囲んだ観客は近くで鑑賞する演劇の迫力と魅力に圧倒されたようだ。

成果

空間を生かした舞台作りはユニークなもので、鳥の劇場での公演とはまた違った魅力に出会うことができたと好評であった。

役者、演出家というアート実践者と地域住民との交流によって幅の広い年齢層、特に次世代の演劇という文化芸術への関心が広がり、見方、考え方の多様性の認識が増大した。アフタートークを兼ねたワンコインパーティー等に多くの一般参加者があり、交流を深めることができた。

開催期日：H21.6.22 / 会場：鳥取大学アートプラザ

財源：鳥取大学地域貢献事業 / 共催：特定非営利活動法人鳥の劇場

参加者数：80名





事業内容

ルーマニアのシビウ市にあるルーチアン・ブラガ大学(LBUS)では、国際演劇祭、地域劇場と連携し、アートマネジメント人材を育て、目覚ましい成果を上げている。人口18万人のシビウで行われる国際演劇祭は、平成21年で16回目を迎える。演劇祭がアートマネジメント実践の場となり、LBUS芸術文学部にアートマネジメントコースが設置された。演劇祭及びLBUSを訪問・情報交換し、大学と文化事業の連携による人材育成の組織運営について知見を得ると共に、今後の大学間交流についての端緒を開きたいと考えた。

なお、本学からは、平成21年に地域学研究科2年生が、演劇祭のボランティアスタッフとして渡航している。

平成21年度は、①LBUS文学芸術学部長Alexandre Mitrea氏、演劇・文化マネジメント学科長Cristian Radu氏、国際演劇祭代表・演劇コース教授Constantin Chiriac氏らを訪問、教育内容及び鳥大との交流の可能性について意見交換を行った。②LBUSで演劇及び文化マネジメントを学ぶ学生2名が来日し、鹿野町での「鳥の演劇祭」ボランティアとして参加し、鳥大教員、学生らと交流した。

成果

- ・国際的な文化事業及び文化施設運営の実践を通じて効果をあげているアートマネジメント人材育成の具体例について、一定程度の知見を得ることができた。
- ・演劇祭ボランティアの派遣を契機として、大学間、実践現場間の情報交換と交流ができた。今後の地域学部地域文化学科芸術文化コースにおける、実践を通じた人材育成プログラムについて、有益なモデルを得ることができた。一方、予定していたシビウからの研究者・教員の鳥取への招聘が、急な病気のため実現できなかった。

写真上左 演劇・文化マネジメント学科長
Cristian Radu氏

写真上右 演劇祭と連携した特別ゼミの様子

写真下左 Radu Stanca劇場は、学生が実践
を通じ学ぶ場となっている

写真下右 9月に演劇祭ボランティアとして
来鳥したLBUSの大学院生2名



調査地：シビウ市（ルーマニア）

財源：学長経費（教育・研究改善推進費）

調査・研究

五島
朋子





鳥取出身でドイツ・ブレーメン在住のオーボエ奏者松田素子と、ファゴット奏者のマーティン・ヤーサー、鳥取在住のピアニストで中学校教師の福田真衣の3名によるトリオの演奏会。この3名が出会ったのは、平成20年に行なわれた鳥取生協病院の七タコンサートであった。その翌日には、日南町での「フッペルは知っている」コンサートにおいて、鳥取男声合唱団と共に3名が共演した。これをきっかけに、ピアノ、オーボエ、ファゴットの三重奏のコンサートを一年ぶりに鳥取で開催することになった。

演奏された主な曲目は、F. プーランク作曲「トリオ」、E. ボザ作曲「レチタティヴォ、シシリエンヌとロンド」、上萬雅洋「ラバーズ」、新倉健「長持歌」他。

開催期日：H21.7.11 / 会場：鳥取大学アートプラザ

財源：鳥取大学地域貢献支援事業 / 主催：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター アルテフェスタ2009

参加者数：約80名





織田廣喜氏について語る



事業内容

美術・文学・音楽・映画など幅広い評論活動で著名な角秋勝治氏を迎えて講演会を実施した。副題は映像と語りでつづる70年とした。

角秋氏の生きてきた時代・人生観を踏まえながら「創造者」に焦点を当てた講演であった。氏の秘蔵している写真の中から約100枚をピックアップし映しながら創造者の真の姿を披露して頂いた。

芸術家、俳優、文学者等との深い交流の様子が次々に披露され、興味が尽きない講演となった。特に画家織田廣喜氏との交流の様子は大きな感動を与えた。

成果

鳥取で活躍する著名な評論家ということで参加者の幅がひろがった。

講演の後の交流会ワンコインパーティーにも多くの参加者があり、交流が広がった。

講演

平井 覚

石谷 孝二

開催期日：H21.7.17 /会場：鳥取大学アートプラザ

財源：鳥取大学地域貢献事業

参加者数：70名



一般県民を対象に、芸術の楽しさに触れる機会、継続して制作や練習に参加し発表する達成の喜びを味わう機会を提供する。時間帯を教育・福祉現場で芸術活動を援助している人や仕事を持つ人にも受講しやすいように夜に設定した。参加者の親しみやすさを考え、「芸術をかじってみませんか」を講座のタイトルとし、「コミュニティー・アート講座」副タイトルとした。

「体験講座」は市民の参加しやすさを考え市内の施設を使い、「継続講座とシェアリング」は市内の施設に空きがなかったため、大学、芸術文化センターの施設を活用した。

「いろをかじる」

「かじってみる講座」では、参加者自身の心の中に感じる色彩を「有彩色」を中心に使って表現する色彩構成作品を制作し、第二回目の「まるかじり講座」では、使える部品の数を限定し、さらに「無彩色」を中心に使って色彩構成作品を制作した。作品制作に際して条件を付けることで、条件を満たしながら考えて作る楽しさを体験していただけたと思う。また、「いろをかじる」での「かじってみる講座」と「まるかじり講座」は、それぞれ独立した講座の形態をとったため、第二回目の「まるかじり講座」から新しく参加していただいた参加者があった。

「シェアリング」(作品発表会)は、大学内の地域学部附属芸術文化センターのロビーにテーブルを設置して作品を並べて展示した。講座参加者の作品を全員で鑑賞した後で、一人一人に作品の制作意図や工夫した点を口頭で発表していただいた。完成して展示された作品もさることながら、講座参加者の皆さんの楽しい口頭での発表に、会場は和やかな雰囲気に包まれつつ「シェアリング」を終えることができた。

担当：平井

かじってみる一体験講座

H21.8.28／とりぎん文化会館リハーサル室

まるかじりー継続講座とシェアリング

H21.10.2／鳥取大学地域学部アートスペースⅢ



「かたちをかじる」

この講座の目的にそって、昨年同様粘土を素材に自由な作品をつくるカリキュラムを提供した。「かじってみる」「まるかじり」の共通テーマは「テラコッタ作品を造ろう」である。

第1の目的と最初にひもづくりの方法をレクチャーし、特に気をつける点として、粘土に空気を入れない、厚さを1センチ以内に収める(7mmが理想)ことを強調した。作品の数は一人一点。

巡回しながらそれぞれの人のつくろうとしている形に応じて必要なときに必要最低限度のアドバイスをこなうことを心がけた。時には水の使い方や指や道具の使い方を実際にやって技術的フォローをした。今回は素焼きを業者に任せましたが焼成中に破損するというアクシデントがおきた。そのため「かたちをかじる」受講者の有志に集まってもらい別の時間に追加講座を開いた。

皆さんが意欲的に取り組んでいた。継続講座(まるかじり)追加講座の作品は急遽石谷が焼成した。

担当：石谷

かじってみる一体験講座

H21.9.4／わらべ館いべんとホール

まるかじりー継続講座とシェアリング

H21.9.25／鳥取大学地域学部アートスペースⅡ

それぞれの期日・会場は各報告参照

①かじってみる一体験講座(8.28～9.18の火曜) ②まるかじりー継続講座(9.25～10.16の火曜)

③シェアリングH21.10.17／鳥取大学アートプラザ



「ハーモニーをかじる」

「楽しく歌って幸せに」を活動の大きなテーマに、「歌う」ための基礎的なことをわかりやすく楽しみながら学習し、詩のイメージをからだいっぱい感じて歌うこと、さらにハーモニーの美しさを味わうことで、一緒にうたうことの喜びが実感できることをねらいとした。

体験講座

- (1) 歌をうたうための基礎を学ぶ
- (2) 心を大切に、素直な声でうたいましょう。
 - ＜曲目＞草川信作曲「夕やけこやけ」
 - スペイン民謡「ちょうちょう」
 - 中田喜直作曲「めだかの学校」
- (ウ) ハーモニーを感じよう(基礎編)
 - モーツアルト作曲「牧場の朝」を輪唱する
- (エ) ハーモニーを感じよう(応用編)
 - 新実徳英作曲「火の山の子守唄」をうたう

継続講座

「火の山の子守唄」と木下牧子作曲「地球の仲間」の二部合唱を完成させる
響きのある素直な声で、イメージを膨らませてうたう
シェアリング(発表会)
成果を発表する(「地球の仲間」の発表では、ぬいぐるみも参加)

担当:西岡

かじってみる一体験講座

H21.9.11/とりぎん文化会館リハーサル室

まるかじりー継続講座とシェアリング

H21.10.9・16/鳥取大学アートプラザ



「うごきをかじる」

体験講座

ダンスの表現特性の理解と、ダンスを通してのコミュニケーションを今年度の「うごきをかじる」第一歩の目標と決め、以下のような内容で行った。

- 1. 呼吸といっしょに動く＝心と一つになった動き
- 2. 相手の呼吸を感じて動く・・・トイレットペーパーを2人で持って→みんなで
- 3. 変身する イメージを持つ・・・トイレットペーパーを衣装にして お面をつけて
- 4. 空間を遊ぶ・・・トイレットペーパーで水平に仕切られた空間

受講者は14名で、去年の受講経験者は1名であった。

継続講座

体験講座での動きの経験を、一つの作品として踊り、発表することを目標に、1時間の練習を3回行った。

題は「追憶の森」とした。9人の出演者は個性を発揮しながら全体で呼吸を合わせ、感じ合いながら表現する作品の世界を楽しんでした。

担当:佐分利

かじってみる一体験講座

H21.9.18/とりぎん文化会館リハーサル室

まるかじりー継続講座とシェアリング

H21.10.9・16/鳥取大学アートプラザ



鳥取県内の他、東京、栃木、京都、大阪などからアートNPOや文化活動者の参加があった。また、芸術分野以外に、まちづくり関係者も出席した。

事業の目的

非営利組織(NPO)にとって、資金獲得は、ミッションの遂行と組織運営になくてはならない活動である。昨今の厳しい経済情勢から、自治体からの助成金など公的資金や企業協賛の獲得だけではなく、個人からの寄付が資金調達(= Fundraising)のひとつとして、日本でも関心を集めている。本事業では、日本の寄付の現状と課題を知り、また寄付金で支えられるアメリカの劇場運営のノウハウから、今後の日本の市民社会を支えるファンドレイジングのあり方を考える場を設けた。

事業内容

ゲスト：徳永洋子氏（日本ファンドレイジング協会事務局次長） 青野智子氏（諏訪東京理科大学専任講師）

鳥取市鹿野町で開催される「鳥の演劇祭2」と連携し、2名の講師を招き、シンポジウム形式で開催した。

日本ファンドレイジング協会は、2008年2月に全国各地のNPOや学識経験者、企業人ら全国47都道府県および海外5カ国から580人の賛同人を得て創設されたばかりで、公益法人制度改革や寄付税制をめぐる状況などから、注目される活動団体である。シンポジウムでは、その協会より徳永氏を招き、日本の寄付の現状について、またアメリカとの比較、様々なNPO法人、NGOが工夫をこらして実施しているユニークな寄付集めの方法が、具体的かつわかりやすく示された。

寄付を集めるというのは、単にお金を集めることではなく、寄付を募ることによってNPOのミッションを理解してもらい活動を通じて人と人がつながることであり、またそれによって支援の輪が広がり課題解決が促進される「社会参加型寄付」として、これからは位置づけていく必要があることが指摘された。

青野氏からは、アメリカの地域劇場(リージョナルシアター)について、その活動内容及び収益構造などを解説していただいた。アメリカの地域劇場は、主要都市において、地域を拠点にプロフェッショナルな演劇活動を継続的に行っており、非営利法人として運営されている。様々なデータから、劇場の存続には、地元住民の支持が最も重要であることを示し、市民の支持を得るために、地域劇場が行っているチケット販売方法や、ボランティアの組織化、多様な資金調達活動が紹介された。

成果

- ・これまで知る機会が少なかった日本の寄付の現状と、芸術分野における寄付の新しい可能性について解説を得、具体的な知見を、県内外の芸術文化活動者を共有することができた。
- ・演劇祭の地域演劇ショーケースと同時開催することにより、県外の文化活動者、NPO法人代表の参加も多数あり、芸術文化領域におけるファンドレイジングの課題が明確になった。
- ・講師の話を通じて、多様な団体が知恵を絞って行っているファンドレイジング活動の具体例を知る機会となった。



会場のアートNPOからは、活動資金を巡る厳しい状況についての発言と同時に、ファンドレイジングに関する横断的組織についての提案があった。(上下とも写真提供 鳥の劇場)

開催期日：H21.9.22 /会場：しかの心（鳥取市鹿野町）

財源：大学開放事業 / 共催：鳥の演劇祭

参加者数：38名



平成21年度 鳥取オペラ協会公演
モーツァルト作曲オペラ 「フィガロの結婚」公演

上演

西岡 千秋

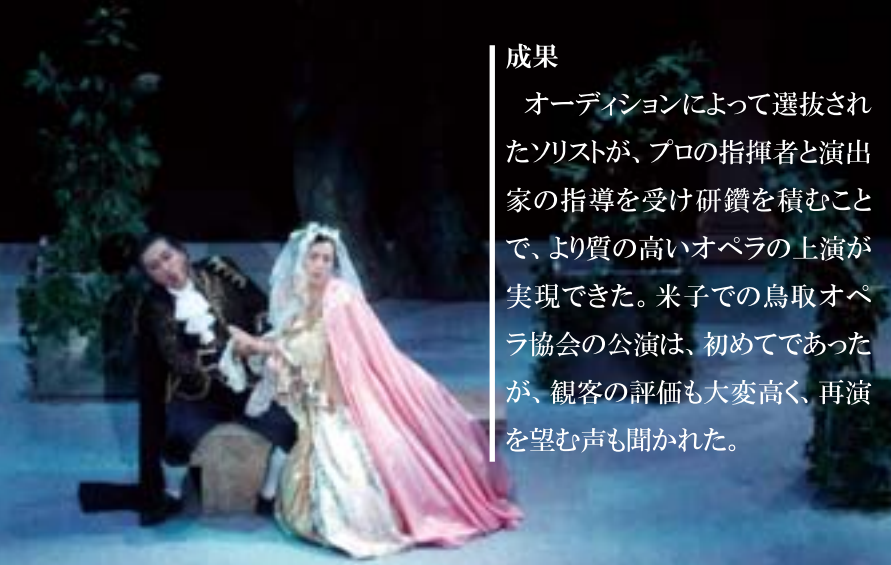
新倉 健

事業内容

モーツァルト作曲のオペラ「フィガロの結婚」の全幕上演を、米子市公会堂において行った。指揮者に東京オペラプロデュースの松岡究氏を、演出家に大阪音楽大学講師の中村敬一氏を迎え、鳥取オペラ協会会員の声楽家がソリストを、オーケストラはミンクス室内合奏団が務めた。センターの教員がプロデュース、副指揮、演奏・演技指導、出演などの支援を行った。

成果

オーディションによって選抜されたソリストが、プロの指揮者と演出家の指導を受け研鑽を積むことで、より質の高いオペラの上演が実現できた。米子での鳥取オペラ協会の公演は、初めてであったが、観客の評価も大変高く、再演を望む声も聞かれた。



開催期日：H21.10.3～4 / 会場：米子市公会堂大ホール

財源：鳥取県文化団体連合会 他 / 主催：鳥取オペラ協会・鳥取県文化団体連合会
後援：鳥取県・NPO法人アザレア文化フォーラム
参加者数：約900名（2回公演）





プログラム

(写真撮影: (株)大阪フォトサービス)

小さなポケット

1. 風のカーニバル —みんなが笑顔で幸せー
ウエズデーズキッズ8人
2. 一粒の中の永遠
作・演 三島 麻美 1人
3. 天を喰む虫
作・佐分利育代 演・ADM 6人
4. もしもし わたし
作・演ダンスコング 9人
5. D. S. L.
作・演 JOU 演奏・松本 充明 2人
6. 絆
振付・松本 大樹 演・ダンスコング,ADM 13人
7. 湯のみイッパイの海
振付・JOU 音楽編集・松本充明
演・鳥取ダンス連
(ダンスコング,ADM,鳥取大学ダンス部) 40人



大きなポケット

1. 風のカーニバル —みんなが笑顔で幸せー
星のいり口 16人
2. ピ・ピ・ピカソ
鳥取大学附属幼稚園 28人
3. ひゅるる〜ん るんるんるん！
〜風と雲と台風と〜
鳥取大学附属特別支援学校
「レッツダンス」部リズムミック 12人
4. み〜つけた！
城北ストレッチリズムダンス 9人
5. 追憶の森
芸術をかじってみませんか受講生 9人
6. 扉を開けて
ダンスコング 8人
7. 天を喰む虫
作:佐分利育代 演: ADM 7人
8. D. S. L.
作・演 JOU 演奏・松本 充明 2人
9. 絆
振付・松本 大樹
演・ダンスコング,ADM 13人
10. 湯のみイッパイの海
振付・JOU
音楽編集・松本充明
演・鳥取ダンス連
(ダンスコング,ADM,
鳥取大学ダンス部) 40人



開催期日: H21. 11. 7〜8 / 会場: とりぎん文化会館小ホール

鳥取市民文化祭参加

財源: ごうぎん鳥取文化振興財団助成事業



上演

佐分利育代



映す 書く 読む 語る 舞う 奏でる 歌う 曲する

事業内容

湖山池を身近に感じ楽しむための、湖山池をモチーフとするアートイベントとして、地域学部教授で書家の住川英明を委員長とした「湖山池・水のことはプロジェクト実行委員会」の企画・運営によるイベントである。

11月19日～23日の期間を通して、北尾勲の短歌を題材とした住川英明の書を展示、11月22日には湖山池をモチーフとしたアートイベントを実施した。芸術文化センターからは、新倉健が実行委員会に参加して主にアートイベントを担当した。アートイベントでは、北尾勲と住川英明の対談、湖山池をテーマとした作曲作品発表(上萬雅洋「奥池に忍ぶ恋」、中村奈保「水の扉」、新倉健「二つの素描～北尾勲の短歌に寄せて～」)、中村奈保作曲の「水の扉」に振付した舞踊作品(田中悦子、三島麻美)などが上演された。

講演
上演
展示
制作・創作

新倉
健

開催期間: H21. 11. 19～23 / 会場: 鳥取大学アートプラザ

財源: 鳥取大学地域貢献支援事業 / 主催: 湖山池・水のことはプロジェクト実行委員会
後援: 地域貢献支援事業 協賛: 日段株式会社
参加者数: 展示: 318名 アートイベント: 78名 合計: 396名





オペラ「窓」(台本：中村敬一)より「二つ目の窓」(初演)
キャスト 女：寺内智子／母：尾前加寿子
指揮：武中淳彦／弦楽四重奏団「鳥」／ハープ：松村多嘉代／合唱団「窓」

事業内容

本事業は、音楽・舞踊・演劇の融合を図った創造的な演奏会を上演することを目的として、とりアート2009(第7回鳥取県総合芸術文化祭)「キラリ☆アートプロジェクト」として開催された。

鳥取県では日頃触れることの少ない現代音楽の作品(新倉健作曲作品)に着目した作曲家の作品展である。

会場は鳥取市鹿野町にある「鳥の劇場」にて行い“物語から聴こえてくる音たち”をキーワードにといった様々な芸術家たちの共演・協演を演出し、演劇空間である鳥の劇場の新しい魅力を探った。プログラムは3部構成で、ヴィオラ生演奏とダンスによる「歌の祭り」、音楽演奏と鳥の劇場の俳優の朗読による音楽物語「よだかの星」、新作オペラ「窓～ウィンドウズ～」の上演、さらに武中淳彦と辺見康孝の作曲による招待作品など、多彩な内容となった。



開催期日：第1回H21.11.14 第2回H21.11.15 /会場：鳥の劇場

財源：鳥取県総合芸術文化祭

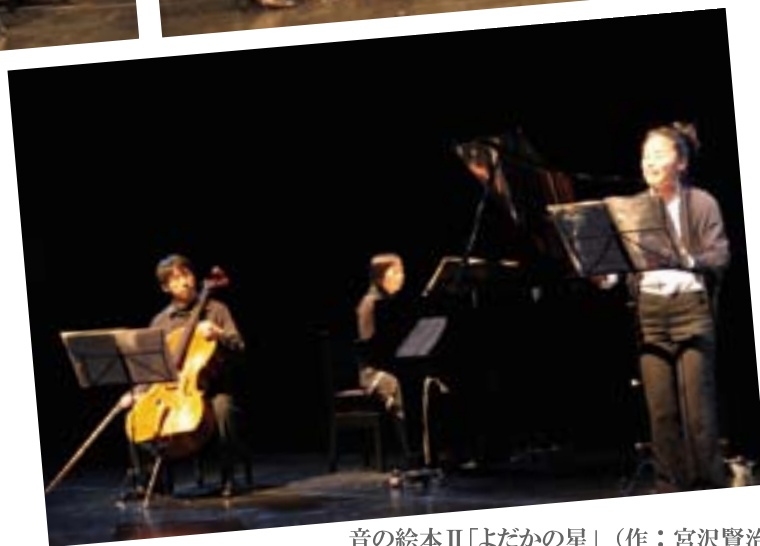
参加者数：約400名



バレエ「忍冬」より「頌歌」～池澤正子を讃えて～
メゾ・ソプラノ：尾前加寿子
ヴァイオリン：辺見康孝／ハープ：松村多嘉代



「ニライカナイの彼方へ」より「DINGON（伝言）」
～故・福島雄次郎先生に捧げる～
Vn1. 海和伸子／Vn2. 横山和加子／Vla. 中山良夫／Vc. 松岡陽平



音の絵本Ⅱ「よだかの星」（作：宮沢賢治）
朗読：中山玲奈／チェロ：松岡陽平／ピアノ：中橋芳恵

とりアート2009(第7回) 鳥取県総合芸術文化祭「キラリアートプロジェクト」

現代音楽家シリーズ 「音の個展Ⅰ」

新倉健 ～物語から聴こえてくる音たち～

第1回	2009.11.14(土)	18:30開場 19:00開演
第2回	2009.11.15(日)	13:30開場 14:00開演

会場：鳥の劇場（鳥取市東野町）

入場料（全自由席）／一般：2000円（当日2,500円） 学生：1000円（当日1,500円）

協賛：アコヤ製紙店、とりさん文化会館、鳥取大学芸術文化センター、鳥の劇場、鳥取大学生協

主催：鳥の劇場実行委員会、鳥取県総合芸術文化祭実行委員会

協賛：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター、特定非営利法人鳥の劇場、作曲工房ババゲーノ

鳥取県、鳥取県教育委員会、鳥取県文化振興財団、鳥取県文化団体連合会

後援：鳥取市教育委員会、鳥取市文化財団、鳥取市少年少女合唱団、山陰少年少女合唱団リトルフェニックス、合唱団「窓」、池澤正子ダンスアカデミー

協賛：鳥取市教育委員会、日本海ケーブルネットワーク、新日本海新聞社、山陰中央新報社、朝日新聞鳥取総局、毎日新聞鳥取支局、産経新聞鳥取支局、読売新聞鳥取支局、BSS山陰放送、山陰中央テレビ、エフエム山陰、FM鳥取、いなびりびょんネット、日本海テレビ



「歌の祭り」 ヴィオラ独奏：中山良夫／ダンス：三島麻美

すべて写真撮影：田添幹雄

主催：音の個展！実行委員会 鳥取県総合芸術文化祭実行委員会

共催：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター 特定非営利法人鳥の劇場 作曲工房ババゲーノ 鳥取県 鳥取県教育委員会 鳥取県文化振興財団 鳥取県文化団体連合会
協賛：鳥取男声合唱団 鳥取女声合唱団 混声合唱団「みお」 鳥取市少年少女合唱団 山陰少年少女合唱団リトルフェニックス 合唱団「窓」 池澤正子ダンスアカデミー
ダンス・コング ミックス室内管弦楽団 鳥取市交響楽団 鳥取オペラ協会 鹿野町民音楽祭実行委員会
後援：鳥取市教育委員会 日本海ケーブルネットワーク 新日本海新聞社 山陰中央新報社 朝日新聞鳥取総局 毎日新聞鳥取支局 産経新聞鳥取支局 読売新聞鳥取支局
BSS山陰放送 山陰中央テレビ エフエム山陰 FM鳥取 いなびりびょんネット 日本海テレビ

事業の概要

少子高齢化、人口減少、産業構造の変化などの中で、中心商店街の空き店舗や、中山間地の空き家や廃校が増えている。このような使われなくなった建物を、地域の資源ととらえて、積極的に活用する試みが各地で進められている。なかでも、国内外から優れた芸術家を招聘し、一定期間その地域に滞在してもらい、作品を制作・発表する「アーティスト・イン・レジデンス(AIR)」が、このような空き家・空き店舗を巧みに使いこなしつつ、地域活性化へとつながる仕組みとして、ユニークな成果を生み出し、注目されている。

それぞれの地域特性を生かし、独自のやり方を工夫して注目される別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」(大分県別府市)、「神山アーティスト・イン・レジデンス」(徳島県神山町)、「AIROnomichi」(広島県尾道市)の実践を紹介し、アートによるまちづくりの醍醐味を共有すると同時に、鹿野町を具体的な素材として、アーティストと空き家の掛け合わせで何が可能になるのかを、パネリストからの提案も踏まえ考える。

事業の内容

①ワークショップ「空き家にて冬眠」

講師 三上清仁氏(美術作家/AIROnomichiコーディネーター)

実際に鹿野町内の空き家を使って、一般参加者と共に作品を作るワークショップを開催した。個人住宅という限られた空間であるため、参加者数を絞った。参加者は、もういらなくなったもの、あるいは忘れてしまいたい記憶が宿った品物などをひとつ持参し、空き家で採取した多彩なモノを使って蓑虫のようになると、各自作品を作った。このワークショップ作品と作業の様子は、午後のフォーラムの中で紹介された。

②フォーラム

パネリスト

- ・大南信也氏(NPO法人グリーン・バレー理事長)
- ・三上清仁氏(前掲)
- ・田島怜子氏(NPO法人BEPPU PROJECT職員)

パネリスト3名から、まず、各地での事例とその考え方について報告して頂いた後に、鹿野町のこれまでのまちづくり活動について、NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会小林清氏より報告があり、全体での意見交換を行った。午前中の鹿野町散策とまちづくりの成果説明を踏まえて、鹿野町での可能性について討議した。

開催の様子(写真提供:いんしゅう鹿野・まちづくり協議会)
ワークショップ「空き家にて冬眠」



空き家で作品を作る



当日のフォーラム会場



開催期日:フォーラム H21.11.21 ワークショップ H21.11.21 /場所:しかの心(鳥取市鹿野町)

財源:地域貢献支援事業費事 鹿野まち普請の会

参加者数(内訳):フォーラム 51名 ワークショップ 13名(限定)



事例1 BeppuProjectの取り組み(田島氏)

大分県別府市の中心商店街の空き店舗を、文化活動や交流拠点として活用できるよう付加価値をあたえて改修(リノベーション)し、大学や福祉関係のNPO、文化活動団体が運営することで、商店街の中に人が集い回遊するネットワークづくりを展開している。改修後の空き店舗、空き家をplatformと名付け、現在13ヶ所、将来的には30ヶ所に増やし、「星座型面的」ひろがりを目指している。

09年春は、これらのplatformとともに、別府の町の魅力を披露すべく、別府現代芸術フェスティバル2009「別府混浴温泉世界」を開催した。①サイトスペシフィック(この町、この場所に固有の作品展開)②アーティストが滞在し制作するレジデンス、③美術の他に、音楽・ダンスもある複合型フェスティバル、④地域資源とアートを結びつけることによって、散策・発見ができる、⑤公設民営ではなく、市民主導型の運営、といった特徴を持ち、これまで別府温泉街の顧客としては少なかった若い女性の来街者増、28億円の広告効果を生んだという。また、フェスティバルを契機とした、若者の定住者が、報告時点では9名を数える。

事例2 AIR Onomichi (三上氏)

広島県尾道市の斜面地は、地形上の制約と寺社領地という性格などの要因が絡み合って、老朽化した住宅の建て替え更新が極めて困難な状況となっており、放置された空き家が増えている。こうした地域の中で、比較的若い世代が中心となって、空き家再生プロジェクトというNPOを立ち上げ、様々なワークショップやイベントを開催している。市内のみならず、市外・県外からも参加者を集めながら建物再生を進めている。尾道大学の美術教員である小野環氏とアーティスト・ユニット「もう一人」を結成して、作家活動をする三上氏は、この空き家再生に、アーティストとして関わる手段としてAIRを2007年より隔年で開催している。海外からのアーティストも招聘し、尾道大学で芸術を学ぶ学生たちがアシスタントとして汗を流しながら、改修工事とは違った角度から、空き家に魅力を与え、また空き家の蘇生へとつなげている。

学生、若者、商店主、芸術家らが、空き家を媒介に多様に関わり合いながら、尾道山手の新しい魅力を作りだし、若い年齢層の移住・定住・開業が進んでいる状況が報告された。

事例3 AIR神山(大南氏)

徳島県神山町のAIRは、「青い目の人形」の里帰りという国際交流事業への取り組みから始まり、徳島県の芸術村構想とも呼応しながら発想され、工夫を重ねて、神山町ならではのユニークな方法で継続開催されてきた。

特に、情報技術を巧みに使って、AIRをサポートする町民の情報交換、アーティストのサポートを行い、また、海外の芸術文化関係機関への情報提供や、ホームページのコンテンツや公募条件によって、海外アーティストの応募数を格段に増やしてきた。AIRの実践経験を踏まえて、部分的な経済支援のみを行う滞在型事業、物的支援しか行わないレジデンス事業にも新たに着手し、これらの波及的事業がクリエイティブな人材を惹きつける魅力発信源となっている。

ほかにもAIRのなかから派生した活動が、商店街の再生や、森づくりにつながるなど、アートをツールに広く地域づくりへと展開している。ここには、「創造的過疎」という戦略があり、40年後の町の人口構成を描きながら、空き家・空き店舗と移住意向者とのマッチングを、NPO法人が中心となって進めている。

事業の成果

- ・アーティストによるワークショップを同時に開催し、アーティストがどのように空き家という資源に関わっていくのか、その場でしか実践できないサイトスペシフィックなアート活動とはどういうものか、限定的ではあるものの、実際に体験できる場を提供できた。
- ・空き家再生に取り組むNPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会と連携することにより、まちづくり実践者間の深い交流と情報交換の場となった。
- ・パネリストには、鹿野町でのこれまでのまちづくりや空き家再生の取り組みについて、事前にレクチャー、町内視察をしてもらい、フォーラム開催地鹿野町の魅力や、アーティスト・イン・レジデンスの活かし方について、具体的な提案を受けることができた。
- ・フォーラムを契機にパネリストの提案により、翌平成22年8月、尾道より3名の若い女性作家を招いた、鹿野町でのアーティスト・イン・レジデンス「楽園的絵画」の実現につながった。



ワークショップ参加者の作品
(撮影 三上清仁)



2009アルテフェスタ コレペティトール田島亘祥氏による「オペラ歌唱の実際」公開レッスン

事業内容

国内外で活躍するコレペティトール田島亘祥氏を講師に招き、県内の声楽家を対象として、公開レッスンを行った。レッスンでは、イタリア語のテキスト(歌詞)を読み込むことから始まり、それぞれの受講者のレベルに合わせ、実際の演奏において重要なポイントの指導がなされた。

成果

国内外のオペラ界で活躍するコレペティトールの指導により、受講者のより一層の技術・表現力の向上に寄与することができた。また、合唱関係者の聴講も多く見られ、受講者のみならず、幅広い層の音楽関係者へオペラアリアの魅力を知らせるきっかけとなった。



開催期日：H21.12.6 / 会場：鳥取大学アートプラザ

財源：鳥取県文化団体連合会 他
主催：鳥取オペラ協会・鳥取県文化団体連合会 共催：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター
参加者数：約30名



ウーケシタ

西岡 千秋

平成21年度(2009年)のアートフォーラム「辻村寿三郎公演会」のポスターおよびチラシのデザインを行った。

守るべき基本デザインは、

1. 画面上半分は講演者を表現する主たる写真で構成すること、
 2. タイトル文字やその他の文字情報と図や写真は、全て左右対称に見えるように配置すること、
- の2点のみとした。

基本デザインの2点の方針を守りながらデザインし、一連のアートフォーラムの講演会の事業であることがアピール出来たと思う。

基本デザインの2点の方針を守りながらデザインしたが、予算の関係や日程等の関係でそれぞれの細部は変更される結果となった。



■著名な人形作家である講演者の辻村氏から送られてきた写真3枚がいずれも横位置の写真であったために、基本デザイン1の「画面上半分は講演者を表現する写真のみで構成すること」を守ることが出来なくなりました。熟慮の結果、画面の上半分は2枚の横位置の写真で構成することとして、基本デザイン2をクリアするように工夫した。

■基本デザイン2の「タイトル文字やその他の文字情報と図や写真は、全て左右対称に見えるように配置する」を強調するために、同じ写真を左右対称位置に2回使い、左側の写真は裏焼きとした。チラシはポスターをA4に縮小して使用した。



■角秋勝治氏の講演会のチラシは、筆者が提案した基本デザイン2点を守りながら附属芸術文化センターの石谷教授が自身でデザインしたもの。元新聞記者である講演者のイメージがデザインによって良く表現されたと思う。

開催期日：H21.5.17 および H21.7.17 /会場：鳥取大学アートプラザ

財源／後援・共催など／参加者数：詳細は開催された報告のページによる





事業内容

鳥取大学研究・国際協力部社会貢献室より、芸術文化センターにサイエンスアカデミーでの講演要請があった。それを承けて鳥取大学が地域学部で芸術文化センターを立ち上げて6年目に入っている時期に、どのようなテーマが良いのかをセンター教員全員で話し合いメインテーマを、「まちに芸術の風・いま鳥取から」～芸術文化センターの試み～とした。講演では各教員が各回を担当し、教育支援あるいは研究を通じての地域活性化や芸術文化の進行を実践して来た成果を中心に講演した。

各回の演題は以下のとおりである。

- ・275回 「芸術文化センター稼働中」(石谷 孝二・写真上)
- ・276回 「みるダンスするダンス」(佐分利育代)
- ・277回 「音の絵本」朗読と音楽で楽しむ物語の世界(新倉健)
- ・278回 演劇祭とまちづくり「鳥の演劇祭」から見えるもの(五島朋子)
- ・279回 基礎造形と美術・デザインの関係について(平井寛)
- ・280回 「歌う」ということ(西岡千秋)
- ・281回 芸術文化 ころろをひきつけつなぐもの(高阪一治)

成果

これまでの様々な芸術文化活動を各教員が紹介し、地域づくりにおける芸術文化の役割についてともに考えることができた。また、各教員の専門性を生かしたユニークな内容と試みにより、サイエンスアカデミーに新たな風を起こすことができた。



開催期日: H21.12.12 / 会場: 鳥取県立図書館2階大研修室 (琴浦町図書館、日野町図書館でもライブ中継)

財源: 鳥取大学 研究・国際協力部社会貢献室

主催: 鳥取大学 共催: 鳥取大学地域学部附属芸術文化センター、鳥取県立図書館 後援: 鳥取県



劇場が社会とともにあるために ドイツの劇場と文化政策をとおして

事業内容

ドイツの文化政策研究者ウォルフガング・シュナイダー博士を招き、ドイツの劇場の制度や現状について学ぶ機会を設けた。シュナイダー氏の講演に加えて、ドイツ演劇や文化政策を専門とする日本人研究者と、日本の劇場主宰者を交えた座談会を行った。

「鳥の劇場」での演劇公演『母アンナの子連れ従軍記』公演終了後に行い、多くの聴衆を得ることができた。

講演+座談会

「劇場が社会とともに在るために
～ドイツの劇場・文化政策を通じて」

講師

ウォルフガング・シュナイダー博士
(ヒルデスハイム大学文化政策学部長)

講演 17:00～18:00

座談会 18:00～ 19:00

座談会ゲスト

谷川道子(東京外国語大学教授)

藤野一夫(神戸大学教授)

中島諒人(鳥の劇場主宰)

司会 五島朋子(鳥取大学)

講演



写真上 「鳥の劇場」ホワイエで講演するシュナイダー氏

写真中 ドイツ演劇研究者谷川道子氏

写真下 座談会の様子

(すべて写真提供:鳥の劇場)

開催期日:H22.1.30 /会場:鳥の劇場(鳥取市鹿野町)

財源:芸術文化センター運営経費 /主催:芸術文化センター 東京外国語大学 NPO法人鳥の劇場

参加者数:約100名

五島
朋子

95



事業内容

目的

「青少年のためのオペラ入門」は、地域の幼児や小・中学生などが平素触れる機会の限られている、オペラの楽しさや面白さを、身近に体験することにより、幼児・児童・生徒の心の豊かさを培い、未来の総合芸術の担い手及び鑑賞者を育成することを目指した。

内容

幼児や小・中学生にとって、面白く、親しみやすいオペラを制作し、幼稚園、小・中学校、特別支援学校などで訪問上演を行った。制作・上演したオペラは、松井和彦作曲「イソップ・オペラ三部作」より、「羊飼いと狼」、フンパーディンク作曲「ヘンゼルとグレーテル（抜粋版）」、モーツァルト作曲「バスティアンとバスティエンヌ」の三作品である。

また、青少年およびその保護者を主な対象として、「青少年のためのオペラ入門」の講座を鳥取大学において開催した。



1) 松井和彦作曲

「イソップ・オペラ三部作」より「羊飼いと狼」

イソップの原作を、面白おかしく、しかも分かりやすくオペラ化している題材であり、子ども達は、開演して瞬時にオペラの世界に入り込んでいたようだ。特に、羊飼いが何度も嘘をついて、農民を困らせて得意になる場面と、狼が登場して羊飼いを食べようとする場面は印象的だったようで、子ども達は、オペラ公演が終わってから一ヶ月くらいは、「大変だー、狼だー」というフレーズを、校内で歌って楽しそうだったという報告を、小学校教員からいただいている。

＜出演＞羊飼いは小椋美香子（賀露小）・寺内智子（東郷小、米里小）（Sop.）／狼は西岡千秋（Bar.）／農民は尾前加寿子、鶴崎千晴、関力仁、上垣彬光

＜演奏＞指揮：新倉健（賀露小、米里小）・上萬雅洋（東郷小）／ピアノ：瀬川則子／打楽器：上萬雅洋（賀露小）

＜お話・進行＞小椋美香子（賀露小）・西岡恵子（東郷小、米里小）

＜照明＞斉藤啓（鳥の劇場）

※舞台スタッフ：数名

上演時間：約20分＋ミニコンサート

① ③ ④



開催期日／会場（すべて鳥取市）／参加者数 計1407人：①H21.12.10／賀露小学校／326名

②H22.1.24／鳥取大学附属特別支援学校／28名 ③H22.1.26／東郷小学校／47名

④H22.2.3／米里小学校／257名 ⑤H22.2.10／鹿野中学校／162名 ⑥H22.2.14／鳥取大学／約120名

⑦H22.2.16／神戸小学校／48名 ⑧H22.2.22／鳥取第五幼稚園／152名 ⑨H22.2.25／鳥取第一幼稚園／267名



2)フンパーディング作曲

「ヘンゼルとグレーテル」

フンパーディングの「ヘンゼルとグレーテル」を、小学校低学年向けに縮小・抜粋したもので、脚本と編曲は鳥取オペラ協会の育成部によるものを上演した。始めと終わりの部分で、子ども達が参加して踊る場面を設定したり、魔法の呪文に学校名(幼稚園名)を加えて、子ども達が主人公と一緒にオペラの世界を創っていくことを重視している。

この試みは功を奏したようで、子ども達は歌や踊りに楽しそうに参加し、また呪文の箇所では、自分達の学校名(幼稚園名)が折り込まれた、魔法を解く呪文を、大きな声で懸命にグレーテルに教えて、このオペラに積極的に“参加”していた。

＜出演＞ヘンゼル(M.Sop.):駒原友美/グレーテル(Sop.):小倉知子/魔女・母(Sop.):鶴崎千晴/父(Bar.):山田康之(特別支援、神戸小)西岡千秋(第五幼、第一幼)/語り手(老ヘンゼル):松本厚志(特別支援、神戸小、第一幼)上萬雅洋(第五幼)

＜演奏＞指揮:橋本知明/ヴィオラ:楊紅/ピアノ:山下依見/打楽器:金築恵利佳

＜お話し・進行＞小倉知子(神戸小)

＜照明＞伊中昌宏(オハラ企画)

※舞台スタッフ:数名

上演時間:約30分+ミニコンサート(神戸小)

② ⑦ ⑧ ⑨



3)モーツァルト作曲

「バスティアンとバスティエヌ」

中学校の音楽鑑賞として上演した。モーツァルトが12歳の時に作曲したオペラということで、中学生のほぼ同じ年齢であつたことが見る側に親近感を与えられたのではないかと察することができる。上演中は大変静かで鑑賞マナーもよく、また時に笑いもあり、生徒らはリラックスして鑑賞していた。

この度は、学校の近くにある「劇場」での上演だったので、学校での鑑賞とは一味違う空間で、初めてのオペラ鑑賞という体験は、中学生にとって格別なものと思ふ。

＜出演＞バスティアン(Ten.):小谷弘幸/バスティエヌ(Sop.):佐々木まゆみ/コラス(Bar.):山田康之

＜演奏＞指揮:西岡千秋/ピアノ:瀬川則子

＜照明＞斎藤啓(鳥の劇場)

※舞台スタッフ:数名

上演時間:40分+ミニ・コンサート

⑤上演会場:鳥の劇場



【講座】親子のためのオペラ講座

「オペラへようこそ!!」

～オペラづくりのうらがわ「ヘンゼルとグレーテル」のけいこ場をのぞく～

この事業で訪問上演をしている「ヘンゼルとグレーテル」を題材として取り上げて、前半は、わかりやすくオペラの様々な魅力を解説した。とりわけ、歌手の歌や演技を行いながらの具体的な解説が非常にわかりやすく、子どもから大人まで楽しんで大変良かったと好評だった。また、音楽表現としての言葉の扱い方に関しては、合唱活動を行っている聴衆から、非常に示唆に富み、参考になったという声をいただいた。

＜講師＞中村敬一(オペラ演出家)

＜出演＞ヘンゼル(M.Sop.):駒原友美/グレーテル(Sop.):小倉知子/魔女・母(Sop.):鶴崎千晴/父(Bar.):山田康之/語り手(老ヘンゼル):松本厚志

＜演奏＞指揮:橋本知明/ヴィオラ:楊紅/ピアノ:山下依見/打楽器:金築恵利佳

＜照明＞西岡千秋

※舞台スタッフ:数名

⑥

事業内容

鳥取県倉吉市では多くの優れた彫刻家の作品が市内の各所に設置され、彫刻による街づくりが進められている。特に「緑の彫刻賞」を設け、受賞作家に作品を依頼するという「倉吉方式」は大きな成果をあげて今日に至っている。「緑の彫刻賞」をはじめ「前田寛治大賞展」「菅橋彦大賞展」の三大事業を立ち上げ、中心的な役割を果たしてきた倉吉博物館の前田館長を迎えて「緑の彫刻賞」事業の発端やその意義、そして今後の芸術による街づくりの方向性についてお話を伺った。

成果

スライドを見ながら彫刻が地域に根付くための意義そして課題や問題点を分かりやすく解説した講演会は多くの参加者に問題意識を投げかけた。



開催期日: H22.2.1 / 会場: 鳥取大学アートプラザ

財源: 鳥取大学地域学部長経費 / 共催: 株式会社 キーワード

参加者数: 70名





事業内容

鳥取大学学生が、授業で制作した、こどもミュージカル「いばら姫」を、地域の養護学校と幼稚園（児童、生徒、保護者）及び、一般県民対象として、2日間合計3回の上演を行なった。

第1回公演

平成22年2月19日（金）

白兔養護学校訪問学級

第2回公演

平成22年2月24日（水）

10時20分開演

とりぎん文化会館小ホール

第3回公演

平成22年2月24日（水）

13時30分開演

同上



本年度は、多くの観客が入場し、第2回、第3回公演は、ほぼ満員の盛況であった。

成果など

- ①大学での学修の成果を地域に公開することにより、地域に開かれた大学のあり方を示すことが出来た。
- ②ふだん舞台芸術に接する機会の限られている、養護学校生徒や幼稚園児に鑑賞の機会を提供することが出来た。
- ③地域に公開するという目標を持つことにより、授業に対する学生の自主的な意欲を高めることが出来た。



開催期日／場所：第1回 H22.2.19／白兔養護学校訪問学級 第2・3回 H22.2.24／とりぎん文化会館小ホール

財源：ごうぎん文化振興財団 / 主催：芸術文化センター 助成：ごうぎん文化振興財団

参加者数：約350（延べ人数）



事業内容

鳥取県で作曲をしている人々が自分たちの作品を持ち寄り、多くの人に作品を聴いてもらおうという活動を行っている、作曲工房「パパゲーノ」の四回目の作品展。鳥取市鹿野町を拠点に全国的な活動を展開している、劇団「鳥の劇場」の音楽を担当している作曲家である武中淳彦氏が新たなメンバーとして参加し、自作自演をおこなった。鳥取大学内の「アートプラザ」が演劇サークルの公演に使用されたために、芸術文化センターのアートスペースⅠにての開催となった。作曲と演奏者との練習に労力と時間を割かれたのか、広報活動が不十分であったため、入場者数はこれまでの最低の30名程度であった。



開催期日：H22.3.7 / 場所：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター「アートスペースⅠ」

財源：ごうぎん鳥取文化振興財団助成事業 芸術文化センター
主催：作曲工房「パパゲーノ」 共催：芸術文化センター「アルテ・フェスタ2009」
参加者数：約30名



鳥取大学地域学部棟が改装されて附属芸術文化センター関連施設も改装工事が完了したので、センターの入り口も兼ねている学部棟北側の入り口に掲げられていたプレート(看板)とアートプラザに掲げられていたプレート(看板)をデザインし直した。基本デザインについては変更はせずに、プレート(看板)のサイズを大きくし、文字と文字部分の背景の色をペイント仕様からメッキ仕様に変更し、センターを訪れる人に対しての視認性を高めた。

■入り口用プレート(看板)。英文文字と背景をメッキ仕様にして、明るく楽しい雰囲気を感じられるようなデザインとした。



■学部棟北側の入り口から入ると、アートプラザ等の主要な施設が左に曲がった奥にあり、どこが附属芸術文化センターなのかが分かりにくかった。そこで、学部棟北側入り口の外とそれに続く学部棟内の廊下の二か所に同じプレート(看板)を設置して、「二つのプレート(看板)に挟まれた場所が附属芸術文化センターの主要な施設であるのだな」と、センターを訪れる人に理解してもらえるようにプレート(看板)の設置場所を工夫した。



■アートプラザ用プレート(看板)。入り口用プレート(看板)と共通性を持たせたデザインとした。



■ピンク色のドアとのマッチングも狙ったデザインとした。

制作・創作

平井
覚

